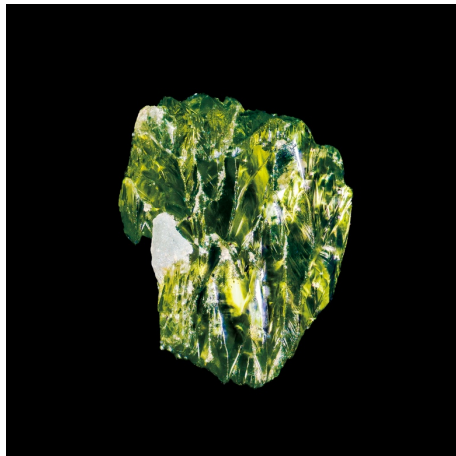
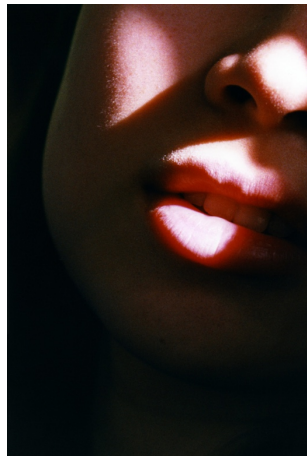




無価値の価値 © susumu okada



唇 © azusa yamaguchi

showcase #8

“共振体 - Resonators”

curated by minoru shimizu

岡田 将 | 山口 梓沙

2019年4月12日（金） - 5月12日（日）

会期中 金・土・日 12:00-18:00 開廊

オープニングレセプション：4月12日（金）18:00-20:00

アポイントメント 承ります

eN arts では、清水穰氏のキュレーションにより、写真・映像に特化したグループ展 “showcase #8” を開催いたします。展覧会のタイトルが示す通り、写真及び映像の現代若手作家の「ショーケース」となるこの展覧会は2012年からスタートし、本展がシリーズ8回目の展覧会となります。“showcase” 出展作家の多くは キヤノンが主催する公募展「写真新世紀」受賞作家です。今回は、2018年度キヤノン写真新世紀優秀賞受賞者 岡田将 と 2017年度キヤノン写真新世紀優秀賞受賞者 山口梓沙のお二人が 副題である“共振体-Resonators”という括りによって選出されました。

そして 今年 eN artsは 第7回を迎えるKYOTOGRAPHIE2019に KG+として参加致します。KYOTOGRAPHIE2019のテーマは「VIBE」—私たちの感覚を研ぎ澄まし、自身の中に眠る何かを揺るがし覚醒させるもの—。そのKYOTOGRAPHIE2019のサテライト展示としまして、showcase #8 では、被写体から発せられるVIBEを感じた二人の作家が、各々のレンズを通して表現した作品群をご紹介します。それらの作品と対峙したとき、鑑賞者である皆様の内なる感性が揺れ動かされますよう、心から願っております。

eN arts | Naomi Rowe

eN arts

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側円山公園内八坂神社北側
www.en-arts.com | info@en-arts.com | 075-525-2355

showcase #8 “共振体 - Resonators” curated by minoru shimizu

2012 年に、才能ある新人を紹介する小企画展として始まった「showcase」も今年で 8 回を数え、今回初めて Kyotographie に参加しようとしています。

第 1 回と第 2 回は「ネオ・コンボラ—cool & critical」と題して、日本の 70 年代の「コンボラ写真」の途切れた系譜を継ぐ、若手世代の多彩な表現を集めました。第 3 回「日本の肖像 Japanese Portraits」展では、不安定な未来を抱える現在の日本の肖像表現を考察し、続く第 4 回は現代における Constructed Photography を再考する「つくりもの construct」展、第 5 回は同じく現代における Snapshot を再考する「偶然を拾う—Serendipity」展を企画しました。第 6 回は、写真の物語性について検討する「Storytelling、引用の物語」展、第 7 回は「あるがままか画像加工か」という対の代わりに「写真かスキャンか」という対においてデジタル写真表現を考察するものでした。（詳細は eN arts の HP 内アーカイブをご覧ください）

*

2019 年度の Kyotographie の総合テーマは「VIBE」ということなので、今回の showcase ではまさに世界から発せられるヴァイブレーションを感受し、それと共振して写真を制作する 2 人の作家を選びました。言い換えれば、彼らの写真は、事物の写真ではなく、事物が発するヴァイブレーションと「共振するもの resonators」としての写真なのです。

岡田将（おかだすすむ 1984 年生）は、2018 年度キヤノン写真新世紀優秀賞（Sandra Philips 選）受賞。岡田が共振しているのは、芥子粒のような石に秘められた長大な時間です。作家は、マクロな自然からミクロな自然まで、人間の時間を超越して流れ続ける地学的・天文学的な時間世界に没入します。写真にはサイズという次元がありません。この本質を活かして、極小の砂粒が、極大の宇宙として撮影されています。

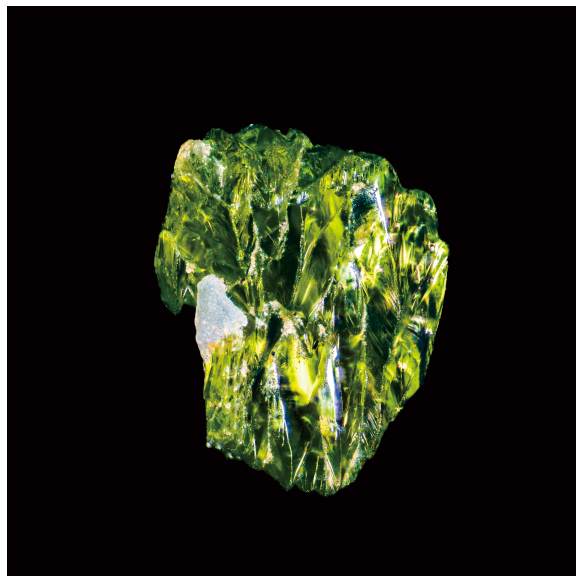
山口梓沙（やまぐちあずさ 1995 年生）は、2017 年度キヤノン写真新世紀優秀賞（清水穰選）受賞。岡田とは対照的に、山口が共振しているのは、まさに人間的時間です。そこに生きている、生きていた人間の気配や記憶が、空間のなかからゆっくりと立ち上がってきます。作家はそれに感情移入するわけではありません。そのかすかな雰囲気や玄聴を、繊細に増幅して何枚もの写真に変換するのです。

2019 年 4 月 清水 穰

清水 穰（しみず みのもる）

写真評論家、1995 年『不可視性としての写真—ジェームズ・ウェリング』（ワコウ・ワークス・オブ・アート）で第 1 回重森弘淹写真評論賞受賞。以降、定期的に BT 美術手帖、Art It といった媒体や写真集、美術館カタログに批評を書いている。主な著訳書に『白と黒で：写真と』『写真と日々』『日々は写真』『プルラモン』（現代思潮新社）；『ゲルハルト・リヒター写真論／絵画論』（淡交社）、『シュトックハウゼン音楽論集』（現代思潮新社）など。これまで Wolfgang Tillmans、森山大道、杉本博司、松江泰治、柴田敏雄、吉永マサユキ、安村崇といった写真家たちの写真集にテキストを提供している。

岡田 将



「無価値の価値」 | 2019 | H1,958 x W1,958 mm | インクジェットプリント © susumu okada

この世に存在するものはすべて無価値だと考えている。世界はただ存在しているだけだ。無価値だからこそ、どんなものにも価値をつけることができ、喜びを見出すことができる。価値をつけることの自由と喜び。それこそが〈無価値の価値〉なのだ。

それらを表現するため、本作では砂を被写体とした。極小で、無数に存在し、その多くが無価値と見なされている砂を採集・選別し、細部までピントを合わせて巨大にプリントすることで、人間が認識するサイズの境界線を取り払い、サイズの背景にある価値観を取り払おうと試みた。

撮影には顕微鏡と高解像度のデジタルカメラを使用した。顕微鏡の性能に対して砂は大きすぎるため、ピントを合わせた部分以外の9割がぼやけていたが、砂の頂点から底辺までピントをずらしながら撮影し、200枚前後の写真からピントが合っている部分だけを抽出・合成するという、デジタル特有の技法を用いることで全体にピントが合った砂の写真を作ることができた。

人間は物事を理解するため、都合よく境界線を引いて分類していく。だが本来は、宇宙に存在する巨大な惑星も、足元に落ちている砂も、等しく同じなのだ。すべては無価値で、自由なのだ。

山口 梓沙



「唇」 | 2019 | H870 x W580 mm | Cプリント © azusa.yamaguchi

生活の中で目にする大量のイメージによって価値基準が操作され、
「見る」行為がそれらに誘導されているように感じた。
促されたものを視界に入れる事は「見る」と呼べるのだろうか。
その様な疑問から今回の作品では
生理的な身体感覚を置き去りにせず、自分のまなざしで世界を見る事を試みた。